

主題	おむつ利用者ゼロへの取り組みは 利用者の心地よさ向上・職員間排泄ケアの意識統一につながる
副題	職員の心理的障壁を低くし、チームとしてのケアを向上させる具体的方法
排泄ケア	
職員間のケア意識の統一	

研究期間	6ヵ月	事業所	特別養護老人ホーム 第二八丈老人ホーム
発表者：奥山 仁美（おくやま ひとみ）		アドバイザー：村松 宜則（むらまつ よしのり）	
共同研究者：東使あや子・佐々木友和・その他全職員			

電話	04996-2-0770	メール	yowakai@smile.ocn.ne.jp
FAX	04996-2-0432	URL	http://www17.ocn.ne.jp/~yowak

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	八丈町は東京の南方海上 291 kmに位置し、交通の便も良く、海洋性気候により、生活がしやすい島である。人口は 8000 人程度で、島内の高齢化率は 32.5%と高い。入所サービスを担っているのは当施設のみであり、重度介助者が多く、多くの利用者が内科的疾患も合併している。当施設は離島という環境下で新たな知識を得にくい中、島内の住民・他事業所に向けての勉強会等を開催し、介護の知識・技術向上を目指している。
------------------------------	---

### 《1. 研究前の状況と課題》

第二八丈老人ホーム西館（以下当施設）では以前より身体状況に問題がない利用者様にはトイレで排泄をして頂くという目標があり、介助量が大きい利用者様に対しては職員 2 人介助にてトイレに座って頂く取組みを行っていた。

その上での課題としては、職員から「なぜ 2 人介助までしてトイレに座って頂く必要があるのか」といった意見や、「介助量が大きい場合、無理にトイレに座って頂くことは利用者様にとって逆に負担がかかってしまうのではないか」という意見が出ていた。このような意見はどちらも一理あるものであり、このために同利用者様に対してトイレ介助を行う場合と行わない場合があるなど統一されていない状態であった。

これらのように研究前の課題の 1 点目は、利用者様に対する排泄ケアがばらばらであった点、2 点目は当施設職員の排泄ケアに関する考え方が統一されていない点である。

### 《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

第一の目的としては利用者様にとって不快でなく、各々の利用者様にとって、最も良いと思われる排泄ケアを行うことと設定した。

またその目的を達成するために、まずは手段としてどのような排泄ケアへの取り組みがあるのかを考え、様々な状態である各々の利用者様に合う排泄ケアを考えていくこととした。

加えて、当研究の期待する成果・目標としては、研究前の課題の 1 つである職員間での排泄ケアに関する意識・考え方を統一していくことを目標とした。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

当施設は入所者 46 床、ショートステイ者 14 床であり、入所者の中でトイレ使用者は 8 名、リハビリ用トイレ（以下リハトイレ）使用者は 18 名であった。

本取り組みの具体的な方向性としては、まず取り組みやすいと考えられたリハトイレ使用者の方々を布パッドへと変更することで、利用者様の心地良さが向上することを職員へ実感して頂き、そこから排泄ケアに関する意識の統一を図ることを考えた。取り組み期間としては、職員間に取り組み自体を行うことを平成 24 年 4 月～5 月の 2 か月間で行い、6 月よりリハトイレを使用されている利用者様 5 名に対して布パッドへと変更した。この際にも、中心になった職員だけでなく利用者様のご家族様や主に担当となる職員に声をかけながら行うなどをし、全職員が関わっているという雰囲気形成していった。その後、今までトイレでの排泄かといった選択肢しかなかったが、トイレで排泄できなくてもその利用者様にとって心地良いのはどのような状態かを考え、マグネット付き布パッドをトイレ使用者に使用していくこととした。また職員間の取り組みに対する意識を向上していくため、医務部門や機能訓練部門といった他部門から称賛を伝える事を積極的に行った。費用としては施設としてマグネット付き布パッドを 20 枚購入し、6 万円程度の施設の協力を得て実施した。活動の成果となったポイントとしては、一部の職員だけを行うという雰囲気ではなく、周知期間を 2 か月間設け、全体で効果を出している状態を作りだすこと。また、トイレかといった考えでなく、トイレでも快適に生活して頂くという視点で行えたことである。

### 《4. 取り組みの結果と考察》

結果は平成 24 年 9 月の時点で、トイレの方は全員、リハトイレの方は 8 割ほど布パッドに変えることができた。また職員間の排泄ケアの認識として、以前は「トイレに座ること」が目的と考えていた職員もいたが、利用者様が心地よくなって頂くことが目的であり、そのためにトイレに座って頂くことが効果的な方法だという認識で統一されてきた。

### 《5. まとめ、結論》

当研究はトイレを通して、利用者様の心地良さの向上、加えてそれまでは排泄ケアの観点が行われていた職員間の意識統一への取り組みを行ったものである。

結果としてトイレ使用者、リハトイレ使用者も 8 割減少することができ、かつ職員間での排泄ケアの観点も統一することができた。

成果が出たポイントとしては、取り組み自体を急に始めるのではなく、緻密な計画を立てた上で十分な周知期間を設けた事。また取り組みを全職員・家族も巻き込んで実施していく事、加えて、効果が実感しやすい点から実行し、職員間で効果を実感できるように進めてきた点だと考えられた。

ちなみにその後の 9 月以降は利用者様本人で意思が伝えられる方はその意思を尊重するとともに、各々の利用者様に最適と思われる排泄ケアを全職員同じ意識の下で行っている。

### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に確認をとり本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。加えて発表データは個人が特定できないようにデータ処理を行った。

### 《8. 提案と発信》

施設によっては、全利用者様をトイレに座って頂くことはできない場合もあるかと思われます。「だからこの施設はダメなんだ」ではなく、現状を分析し、利用者様の心地良さに焦点を当ててみた際に、新しいアプローチが考えられるとわかりました。本研究を通して、多くの施設が少しずつでもケア向上できる事にご協力できれば幸いです。

【メモ欄】